

薬学裏面史—裏から見た薬学の10年—

作者不明（10期生）

はじめに

むかしむかし、素晴らしい一期生がいたんだとき。彼らはなんでもやったんだそうだ、けれど、我々十期生は、無気力だ、無気力だと芳香編集委員が言うので、我々の先輩のこともっと知る必要があるように思えた。そこで、先生、先輩を訪ねて歩いた。裏の話にはまだ裏がある。それは別の機会にして、編集したのがこれである。何かのたしになれば幸いだが、まんず、まんず、一読されたし。（このはじめにの原文はすべてカタカナ書き）

1、創設期の思い出

時は昭和三十年六月の宵のことである。場所は今はなき北一条のどこかの第一ホテル、その一室で水野・木村・三橋の三教授が頭をつきあわせていた。三教授は、赤木先生に「買われて」まずは、と北大を見に来たのだった。薬学科の部屋は医学部の基礎医学の部屋、病院の建物の後を、もらう予定だった。しかし、すべてがこれからだった。コルベン一つ、水浴一つないのだ。そこで三先生は赤木先生の骨折りで集まった寄付によって、どんな道具を買うかを相談していたのである。

それから数日して、金沢へ帰った水野先生を除き、東大に集まった、木村・池原・永井・上田の各先生は三橋先生の部屋で何ごとか企てていた。

そして、ついに貨車一台が北に向かって走り去ることとなったのである。

三十年十月、いよいよ一期生が移行してくることになった。彼らは、赤木先生のガイダンスに於ける「北大の薬学を東大の薬学に優るとも劣らぬものにする。・・・」という言葉に鼓舞され、先生のファイトに感激して、我も我もと薬学を目指した選ばれた人々であった。

一方、この一期生の来る前、新進気鋭の教授連と独身の若い先生方は、最後に就任した藤間先生の着くのを待つて、早速コンパを開いた。遠く文化の中心地からこの「エゾの地」に開拓者の気持でやってきた先生方にとっては、気構えにあふれた会であったろう。

その会のもようをちょっと御披露しよう。場所は「タコフク屋」というおでん屋。新任の十名の先生方挙って、教授連のデンと坐る前で、実際に一升瓶を手に持ち、ヨカチン節を披露。その雰囲気、魅力の程は察するだけで余りあり、あげくは教授連も一緒になって踊り出したそうである。

そして、それから建設の時代が始まる。部屋も狭い、器具もない、それなのに講座当りの予算は二十一万円、借金はうなぎのぼり、という中で、先生方は、大工道具一つ買うにも、元素分析しに東京から来てくれる人の旅費をどこから捻出するかも、借金をどこから支払っていくかも、細かいことまで気を配らねばなかった。

「空巢ねらい」は皆の仕事だった。学生も助手の先生もいろいろ物色して歩いた。ある時、部屋を捜していて、一つの暗い部屋を見つけた。懐中電燈を持ち合わせていなかったが、恐る恐る下りて行くと布団にさわった。びっくりして逃げ帰ってきたが、後で聞くと死体安置室だった。そしてその部屋も何とか供出してもらうことになった。

このように何も無い中にやって来た一期生の生活はどんなだったろう。彼らはまず自ら、立案して歓迎会を催すことにした。そして先生たちと医学部の食堂でお茶とお菓子で談じ合った。

移行して最初の日にテストした。かなり、レベルの高い有機化学の試験で皆奮起した。講義はすべて活力あふれ内容は難しかった。水野先生は2週間に一度試験をした。すると試験は再試を含めて雪だるま式に増えていった。後に再試十五回以上の者ばかりが集まって水野先生を囲んでコンパした。十七人も集まったそうである。

最初は実習室がなかった。それも「空巢ねらい」の成果で、やっと薬化の実習室ができた。夜中にガスが強くなるので、夕方から夜にかけて実験することも多かった。水浴は二人に一つしかなかった。それも先生方が大決心して買って下さったものであった。しかし、絶対的に足りないの、大きな鍋を持ってきて三～四人分一緒に入れて反応させたこともあったという。ある人はキノリンをつくる時、スクロブ反応を行って天井まで二回も吹き上げた。今でもどうしてついたのでかなと思われる跡がついているから、知らない人はとくにご覧になるといい。豪傑ばかりだった一期生は女性も強かったらしく、一緒に窓から出入りしては学部長に見つかって叱られたそう。

最初は忙しかったが、講座が全部できていなかったの講義を充足できなかった。そういう時は助手の先生が話に来られた。又、そのうち講義のない時も出て来たので、街の「アモンド」という喫茶店にたむろしてさながら北大薬学アモンド出張所の態であったとか。

薬学最初の忘年会は学生の某君が安いところがあると、とある怪し気なススキノの一角に教職員、学生をつれていった。女性を含めた四十名にもものぼる人数で怪気炎をあげたまではよかった。お酒がどうも水っぽいというのでお台所にまわってみたら、カンをしているトックリが湯わかしの中でひっくり返ったのをそのまま持って来たことがわかったとか。

冬になると、内地から来た先生が多いのでスキー熱が一時高まって大挙してニセコ山田温泉に出かけた。それきりスキーをしない先生もいらっしやるのでその成果はご推察のほどを・・・。

はじめの頃の暖房は石炭ストーブよろしくの方式であった。廊下にはたきつけ用の薪がつんであった。ある夜近くのラーメン屋からラーメンを取り寄せ、廊下のマキを全部炊いてすすったまではよかったが、次の日小使いさんがカンカンの怒りよう。挙げくのは、前項の張本人と教授が平あやまりにあやまり、やっと小使いさんの気嫌を静めたという。

毎年スキー大会を催すのは最初の冬からの慣例らしい。このスキー大会でも種々のエピソードがあるようである。その一つ。誰だかさん一番になったのはよかったが勢いあまって、賞品をもらうところの真ん中を突き抜けてミズにおちてやっと止まったとか。

初めての夏休みがやって来た。学生は先生を誘って全部で七十名くらいで支笏湖にキャンプに行った。樽前にのぼったが、雨に降られた。いる間ずっとあまりいい天気ではなかった。某先生自ら雨の中で傘をさして御飯を炊いたとか炊かなかったとか。しかし、何の統一した目的も持たないキャンプは最初でもあり、多くの人が参加したりでそれなりの成果はあったが、失敗だった。それ以後は毎夏有志で大雪に登ることになったらしい。多い時には四十名近くが、勇んで出かけたという。夏休み前は、土、日とかけて、足ならしに出かける、身体の疲労度に合わせて均等に荷物を持つ、女性だからと言って、何も背負わないということではなかった。そのように皆で山に行ったり、ハイキングしたり、昼休みは医学部ローンでソフトボールをしたりという毎日の中で日常活動は盛んだった。薬学自体の自治会があり、東大等と連絡をとったりしていた。サークルも盛んで、皆がそのリーダーのもとで活躍していた。歌う会、囲碁、将棋クラブ、ワンダーフォーゲル、映画観賞会、写真クラブ、医学部の謝恩会のため演劇なども本格的に行った。歌う会などは、教授の奥さんまで出てきて、毎週一回昼休みに集まって歌ったという。そのガリ刷りの歌集は重ねると厚さ三センチにもなるのが二冊もできたそうである。

若いに任せての先生方の活躍のほどを一つ紹介しよう。

金岡監督を筆頭とした、学友会と称する学生、職員を構成員とする野球チームは、学内でも列強のうちを占め、黄昏野球でも一般草野球チームを相手に大分いい線まで勝ち抜いたとか。電車の中で二人の先生が顔を合わせると野球の話しかしなかったとか。今、その片鱗すら伺えないのは何たる残念、教室対抗のチームに入れてもらえなくなった先生方もさぞかし残念なことでしょう。

又、十円会を作ったのも一期生だった。若手の先生と学生は読書会のような形でさまざまなことを話し合い理解を深めあった。当時助手の先生方は独身ばかりだったので、学生と一緒に下宿したりしていた。学校では独身の先生たちのために洗濯機を買って備え付けた。その当時のもようをある先生にちょっと話して頂くことにしよう。

＜あのころ＞

若い若いと思っっているうちに学生諸君と十二支の話でもして一回り下が出現して来た。つくづく自分も年を取ったと驚いたり、その年にふさわしく、仕事をやって来たかどうかと気持の焦せりを感じたりする様になってしまった。

薬学科の創立と共に過ごして来た十年をふり返ると苦労も多かったが愉快的思い出も数多い。着任した初めての冬には殆んど全員が会議室(今の二階分析研究室)で「スキーの理論」について池原先生の特別講義を受けスキー道具部品一式を共同購入して組立やらラッカーぬりまで全員でやったものだ。

スキーをはいて「歩く」事が上達の第一歩だと言う事で水野先生などは大学に来られるのに、北二十四条から一時間かけて雪まみれで薬化に現れたりしたものである(その後の脚前の程を私は知っている)。

当時は金子先生を親分として、一人者ばかりの助手集団であったので、よく時間をわきまえずに教授宅にお邪魔したものである。ある正月には赤木先生の家で「教育と研究はどちらが主か」の議論が薬化勢と薬造勢の間で過熱して三面鏡をこわしたり、カーペットをこがすという国会並の事をやって来た(自分が犯人だと思い込んでいるのは沢山いるが、白状しよう。私が真犯人です)。影の声(編集部)・・・大学は教育と研究の両方をやる事が任務ではないか。それを「どちらが主か」なんて云う議論をするから国会並みに成る。こんどは「いかに両方をやりとげるかを論じていただきたい」。北三十条からススキノ迄バン声をあげてデモリ帰りに駅前通りの正月用の「かざり」ものを軒並みいただいて帰るなど、道交法、軽犯罪法を突破して「ガイセン」したものだ。—その後教授が警察に呼ばれてあやまったとかあやまらんとか。—影の声。池原先生宅は助手の夜のたまり場で冬などは酒屋をたたき起こして、飲み明し、その足でスキーへゆくなど何回もやってきた。ジンギスカンをやると犬を追い払うのに苦労したのを覚えている。木村先生宅では、寝る場が無くて押し入れに寝たり、三橋先生の所ではフロの中でご子息を降参させたりもした。助手の間でも下宿の相互訪問が盛んで私が金子サンの下宿を訪ねて彼を待つうちに、泊り込み、彼の分の朝メシを食べていた、等という奇妙な事も有った。こんな調子で乱暴を働いて来たので「近頃の若い者は云々」などと云えたものではない。しかし、これらは我々常日頃、これからの研究は如何に有るべきか、天下国家の将来をどうするか論じ実践して来たそのエネルギーに較べれば微々たるものであり、従って無数の失礼はこれらの情報のほとぼりだと、お世話になった先生方には理解していただいたことにしている。いまではこれらの青年も成長し、或いは老化しそれぞれの形に合わせて巣をつくってしまっ、おとなしく成ったが、巣のないものは余り先生方の事は考えずに行動しては如何かと思う。要するに、我々薬学ゼロ期生はよく学びよく遊ぶ実のある青春を過ごして来たのであると信じている。注: 前述した事柄にいちいち名を挙げなかった事が多いが、勤続八年以上の助手諸氏は多少なり共、貢献している。

2、南から北へ

医学部の間借りの状態で七講座つめこむにはあまりにも狭すぎた。どの講座も一部屋か二部屋、実験台もおけるかどうかという状態だった。そこで捜しに捜しまわってようやく今の北校舎が結核の隔離病棟であったが、病院の新築によって移る事になったので、それをゆずり受けることになった。まだ病人がベットの上にいるとき、某先生ら入って、何間あるか、と測ったそう。病院長に催促して、早々に移転して頂き、すっかり消毒を終えてから改修が始まった。一坪一万円近くかかったそうである。先生方はこの費用を本部や文部省から調達するのに奔走しなければならなかったそうである。そこでハタと困った。七講座全部移転するにはどうしても狭すぎる。学生実習室も南にある。出来たばかりの小学科であったから、二つに分けたら、大きな機械を二つ入れねばならないし、その他いろいろな点が考慮されダメになってしまうのではないかと先生方は大いに不安だった。しかし、仕方がない。そこでいくつ北に行き南にいくつ残るか夜食をとりながら夜中まで相談した。本部の意向としては、合成化学系を北にした方が建物の関係上都合が良いだろうということであった。しかし、学生実習室を北の一番いい部屋に取ったとはいえ、合成化学実験向きではない。ついに考え抜いて、南の学生実習に都合のいいように南に今の三講座が残ることになったのである。

さて、改修も終わり十月、水野先生が「ひっこし」の総司令官となって、空箱集めに奔走した。そして南から北への薬学の大移動がはじまったのである。時すでに二年目の移行後、二期生が四年生のことであった。講義も実験も休んで

総出で人海策戦、二日かかってオヤツ代しめて一万三千円也、人夫は延べ二十五名、しかし隔離病棟であったため、人夫はケガをするからとイヤがり仕事をしなかった。そんなことはないと言ったが本当にケガをしてしまったので、ついに生薬教室の溶媒をおいてある部屋はもとのままで今日に至っている。

移転して何日目かに首をくくって死んだ人がある由、何かにたたられたわけではあるまいが・・・。

電話も最初は北に一台だけという有様だったが、それでもどうにか落ちついて今日にいたっている。

器具などもなくて本当に大変であったらしい。あるとき医学部で分光光度計をくれようとしたことがあった。しかし、医学部の某先生が強引に持って行ってしまった。分光光度計は買えば百万円くらいする。先生方、さぞかし無念だったろう。

何となく当初から、医学部の日陰者扱いをされて、今日の薬学部となるまでには幾多の困難の道を通らねばならなかったのである。

3、四期生の頃

四期生がすべてをつぶした、と一期、二期の人はよく言う。しかし、北と南に分かれ、今の北講堂がサンルームを改良してつくられたのは、移転後、一～二年後のことであり、一同が会する時と場所は限られてしまった。そして、次第にフロンティアスピリットは研究の充実の方向に向い、その中に埋没していった。

その頃の悪名高き、四期生の思い出を一つ語ろう。当時の、衛生学教室には優秀な四年目がこぞって入った。ケツタイな獣じみた大男ぞろい。衛生学教室に入るには大酒のみ、マージャン狂、野球名人たる事が必要であり、その点に関してはまさに優秀人ばかり。衛生が余りにマージャンが強いというので大いに発奮した薬化教室と大々的なマージャン大会。結局は薬化は衛生の実力の程を見せられる結果となる。薬化負けおしみから、衛生がそんなにマージャンに強いのなら学生の論文発表に実力を見せてくれと騒いだとか。

4、五期生の頃

さて、薬学創立五年すぎ、ちょうど安保斗争時の頃の学生はどうであったろうか。安保斗争は、小さく閉じこもり勝ちであった薬学にも波乱をもたらした。職員、学生は共に論じ、デモに参加した。社会情勢の急激な変化は、研究にのみ没頭することを決して許しはしなかった。

その大きなエネルギーを秘めた五期生の、あっぱれなる仕わざを一つ紹介しよう。ロッキセイが移行して来た十月の事でした。ゴキセイを中心に例年どおり歓迎ソフトボール大会をやった。そしてゴキセイはX等で清酒一本当たったそう。それからゴキセイ五期(ゴキ)ゲンよろしく十六、(不明)北の実験室で杯をかたむけた。酒のサカナは別に買った。一度無くなり、又買った。そこへ、声ゾ何ゾと赤木先生が現れて最後に云った言葉が事の始まり。「酒のサカナは有るのかね」一同シンミョウに「有ります」とやった。しかしその後がふるっている。そうしているうちに某貧士、ラーメンを食べたく成ったと曰わった。それからどう話が進んだのやら、さっき赤木さん「酒のサカナは有るのかね」と云ったのは無ければ差し入れするつもりで言ったのではないかと何かと話がはずんだのか、それではと「爐」からラーメン十六個取って、赤木先生の付けにして置いたという。いやはやたいした心臓。その後日十六人は毎日、夜ごとうなされるように成ったとか。それで十六人の「許して下さい赤木さん」の祈りをこめて教授室へ。先生はその時そう言う事は前もって連絡してからするようにと一カツ入れたそう。その後日「爐」のおやじが集金に来た。それを赤木先生は一応、我存せずとツツパねたとか。さすが敵もサルモノ味方もカッチャクモノだ。その又後日、赤木先生十六人分のラーメン代を払ったという。「爐」のおやじもさぞ安心しただろう。ただし二番煎汁は男の飲むものにあらず。わかったかな。

5、十年來の不作

そして十年の歳月は流れた。そこで十年來の不作と言われる十期生が移行してきた。彼らは教養の移行制度改正の最初の犠牲者?であった。教養部の新校舎は無慈悲である。講義のない時は、行き場もなく、うろうろと廊下をうろつき歩かねばならず、ついつい足は学校から遠のく。

そしてついに薬学に放り込まれた彼らは、それでも薬学に何らかの価値を見出したいと願っている。

その十期生が遭遇したあづましくない話を一つ紹介しよう。昭和四十年の初冬、水浸しになりがち、寒々とした南実験室での実習を終え、北の家族的な実験室を与えられた三年目の学生。ところが机の中には先輩の使用品がかたづけられないまま色々のものが残っている。参考書の置き忘れなどはもうかるが徒らに散らかされたままでは頭に来るのが当たり前。中には悪どいものもある。勢良くあけたその中にどういふ積もりなのか汚れた女の下着が入っていたのでは耐まらない。お陰でその御人は鼻をつまみながらそれを捨てに行った。

終りに

さてさて皆様、如何でございました。エピソードなしの六・七・八・九期生の皆様には、はなはだ失礼しました。これひとえに編集氏のいたさぬところとご勘弁下さい。

始めの意図とは似ても似つかぬモノとなり、ただただ、涙しているところでございます。(この終りにの原文はすべてカタカナ書き)

(芳香第 20 号(1966 年発行)p50-p54 を再掲)